

「ICHII」

☆☆☆

2009（平成21）年1月12日鑑賞<ホクテンザ2>

監督：曾利文彦
 原作：子母澤寛『座頭市物語』
 市（瞽女、盲目の旅芸人）／綾瀬はるか
 藤平十馬／大沢たかお
 万鬼（万鬼党のボス）／中村獅童
 白河虎次（白河組2代目）／窪塚洋介
 白河長兵衛（白河組のボス）／柄本明
 伊蔵（万鬼の側近）／竹内力
 喜八／利重剛
 美津（瞽女）／佐田真由美
 小太郎（喜八の息子）／島綾佑
 盲目の男（居合の達人）／杉本哲太
 十馬の母／横山めぐみ
 お浜／渡辺えり
 2008年・日本映画・120分
 配給／ワーナー・ブラザース映画

<「ホクテンザ」さん、ありがとう>
 見逃していた綾瀬はるか主演の『ICHII』を時期遅れながら観ることができたのは、ホクテンザが時期をずらして上映してくれたおかげ。普通は10人前後しかいない観客は、この日はほぼ50%の入りだし、女性同士の客もいた。祝日の夕方この場末の映画館に、女の子たちだけでやってきた彼女たちは一体何者？
 それはともかく、まずはこんな上映をしてくれたホクテンザさん、ありがとう。隣のスクリーンでは、団鬼六原作のエッチな映画『Mの呪縛』（08年）をやっていたが、当然それよりこちらを優先しなくちゃ。

<断然こちらの方がグッド！>
 私が綾瀬はるかをはじめて観たのは『僕の彼女はサイボーグ』（08年）だったが、その印象は美人顔とプロポーションの良さ。このサイボーグ役の演技はかなり難しかったはずだが、結構うまくこなしていた（『シネマルーム19』431頁参照）。
 しかし、『ICHII』における瞽女市はそれ以上に役になりきるのが難しい。なぜなら女座頭市にはそれなりの美しさが必要だが、それ以上に必要なのはリアルさ。勝新の座頭市ほど見事な居合い斬りや殺陣回りを演じることとはできなくても、逆手居合い斬りが学会会になったのではプチ壊し。さあ、運動神経抜群という綾瀬はるかの居合い殺法の冴えは？私の採点では、サイボーグの綾瀬はるかより、断然女座頭市の方がグッド！

<やっぱり男の座頭市より、女の座頭市は大変>
 勝新の座頭市も北野武の座頭市も、ユーモアタップリで男臭くちょっぴりスケベ（？）という個性の強さが売りだったから、面白い脚本さえあれば何本でも1人で主役をつとめることができた。しかし、綾瀬はるか演ずる市はクールビューティーと孤独が売り。ハンパものという点は共通していても、そこはやはり男と女とでは生き方が大きく異なるもの。だって、瞽女屋敷で共同生活を送っていた市が、ある日「離れ瞽女」にさせられたのは、市が掟を破って男と関係を結んだからだが、さてその実態は？
 映画の導入部では、佐田真由美演ずる瞽女美津が、金のためまた肌の温かさを求めて男と関係を持つシーンが描かれるが、その顛末も哀れなもの。勝新演ずる座頭市は男だから、金さえ払えば酒でも女でも自由だが、いくら居合い斬りの達人でも三味線と歌で食っている瞽女は大変・・・。

<2人で一人前・・・？>
 『ピンポン』（02年）で有名な曾利文彦監督の作品を私が観たのは『バクシルー2077日本鎖国ー』（07年）だけだが、これは面白い構想の反面、いくつかの不満もあった（『シネマルーム16』406頁参照）。しかし、『ICHII』はそんなに難しい構想は不要で、いかにエンタテインメント作品としてまとめていくかという遊びゴコロが大切。
 こういう時代劇の出来は、敵役を誰がやるかによって大きく影響を受けるが、万鬼役に中村獅童という大物を起用したのはさすが曾利文彦監督。もっとも、それ以上に面白いのは市が1人だけで万鬼をやっつけてしまうのはあまりにもリアリティに欠けるとみて、もう1人、というより主役は2人で一人前という設定にしたこと。それが、孤独なクールビューティー市に対して、本当は剣が強いくせにどこか間が抜けてユーモラス、しかも名前もトンマイや失礼、十馬という不思議なキャラの男を創出したことだ。そんな役を演ずるのは、どちらかというと真面目な演技派のイメージが強い大沢たかお。
 さて、十馬はなぜ今修行の旅に？万鬼党に絡まれている市をそんな十馬が助けようとしたのは立派だが、その展開と結末は？なるほど、女座頭市1人で主役を張らせるのは少し無理があると見れば、こんな戦略も・・・。

<ちょっとヤクザを美化しすぎ？>
 『ICHII』の舞台は美藤宿。市がここにやって来たのは、父ではないかと感じている居合い斬りの達人の盲目の男（杉本哲太）を探すため。その案内役になるのが、小太郎少年（島綾佑）とその父親である喜八（利重剛）だ。
 この美藤宿は白河長兵衛（柄本明）をボスとする白河組が仕切っており、白河組に仕えるお浜（渡辺えり）の話によると、少し前まではそりゃ賑やかな宿場だったらしい。
 そこに異変が起きたのは、万鬼をリーダーとする万鬼党が町を荒らすようになったため。バクチで万鬼党の連中が派手に騒いでいる姿に、白河組の2代目虎次（窪塚洋介）はおかんむりだが、市の指導を受けた十馬に金を巻き上げられてしまった万鬼党の連中はさらにおかんむり。
 そこで彼らは帰り道の十馬を襲い、「イカサマで稼いだ金を返せ、命だけは助けてやる」と迫ったが、そこであっと驚く大事件が。さらに、コトの成り行きを心配して駆けつけてきた虎次から十馬は用心棒として雇われることになったのだが、この2代目も向こう意気は強いが、2代目の典型のようでどこか心配。病気のため事実上引退している長兵衛は人格者のようだが、それでもヤクザはヤクザ。たしかに万鬼党はメチャクチャだが、それと対比させて白河組のようなヤクザを美化するような視点は少しおかしいのでは？

<異議あり その1ー刀が抜けなければ木刀で>
 別にイチャモンをつけるわけではないが、この映画でイマイチ納得できないのが、なぜ十馬が刀を抜けなくなったのかというエピソードとその対処法。少年の時のトラウマが根深いことはわかるが、十馬少年のミスで母親（横山めぐみ）が両目を失明したというエピソードだけでは・・・？
 また十馬ほどの剣術の腕があるのなら、小者を相手にいちいち刀を抜かなくても、木刀で十分対処できるのでは？それなら刀は「お飾り」としていつか抜けるようになった時のために腰に差しておき、それとは別に木刀を1本差せばいいのでは？

<異議あり その2ー万鬼の戦術は？>
 万鬼には忠実な側近である伊蔵（竹内力）を筆頭として優秀な手下がたくさんいるようだが、伊蔵も万鬼も手下の扱いが少し荒っぽすぎる感がある。つまり、市の腕前を知るにはせいぜい1人か2人の犠牲で十分だと思うのだが、彼らはその犠牲を屁とも思っていないよう。別にならず者ばかりの集団だから次々と犠牲になってもいいのだが、「人の命は地球よりも重い」という最高裁の判例に従えばやはり・・・？
 そんな、かつての日本陸軍と同じような兵隊の使い捨て思想を徹底したのが、ハイライトとなる白河組と万鬼党の集団戦。白河組の若きリーダー虎次は剣術などともに習ったことはないはずだし、子分たちもタカが知れたもの。他方、万鬼の手下たちの剣術の腕は知らないが、白河組の雑魚相手なら万鬼が1人立ち向かえば10人でも20人でもたちまち斬り捨てることのできるのでは？ところが、真っ赤な羽織姿で登場した万鬼は、馬の上でジッと戦況を見つめるだけ。これでは次々と死んでいく万鬼の子分たちがかわいそう。そう考えると、剣術の腕は別として、先頭に立って戦っている2代目虎次の方がリーダーとしては立派・・・？

<最後の決闘の行方は？>
 三船敏郎の『椿三十郎』（62年）も、森田芳光監督が織田裕二主演でリメイクした『椿三十郎』（07年）もラストシーンにおける椿三十郎VS室戸半兵衛の決闘がハイライト。その結末は皆さんご承知のとおりだが、さて『ICHII』における最後の決闘は誰と誰が？
 予想されるのは二択で、①万鬼VS市、②万鬼VS十馬だが、集団同士の決戦においてすら刀を抜いて獅子奮迅の働きをすることができなかった十馬に花道を用意してやる必要があることを考えれば、その対決はきっと・・・？しかし、十馬が万鬼をやっつけてしまうと市の見せ場がなくなってしまうのでは？
 さあ、そんなジレンマ（？）の中、どんな脚本による、どんな結末がベスト？それをここで書くわけにはいかないので、その様子はあなた自身の目で。